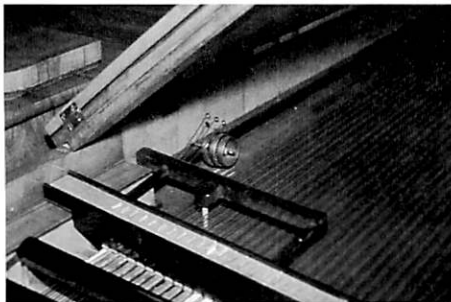


モーツァルトと同時代のシャンツ
のハンマーフリューゲル



ウィーン製ハンマーフリューゲルの内部。鐘や太鼓など
の効果音がだせる仕組み



ヴァツェック・ピアノ工房外観

ピアノの前身 ハンマー フリューゲル

その場にはいない人の噂話はなかなか面白い。しかし運悪くその話題の人物がむこうから歩いてくる事がある。イタリアではこんな時に「ピアノ、ピアノ！」と言う。日本流の「シート！」というのと同じである。

背中にある自分では届かない指圧のツボを誰かに押ししてもらいたい。イタリア人をつかまえて押してもらったのだが、隔靴搔痒、どうも物足りない。こんな時には「フォルテ！」と頼めばもっと力を入れてくれるだろうし、「フォルティッシモッ!!」と叫べば渾身の力をこめて押ししてくれるはずである。

指先のコントロールで音量や音色を変化させられる「フォルテピアノ」という楽器の出現は、音楽史上実にエポックメイキングな事件だった。

バッハもこの新しい楽器の事を知っていた。試弾もしてみたらしいが、特にこの楽器のために限っ

た作品は残さなかった。

しかしハイドン、モーツァルトとなると話は違う。この世代からはピアノが音楽活動のなかで大きな比重を占めるようになり、楽器そのものも日進月歩の勢いで発達する。より大きな音、より広い音域、そしてより輝かしい音色を、というのが当時から音楽家達の要求するところだった。

ハイドンやモーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、そしてショパンが使っていたぐらいまでの古いタイプのピアノを現代のものと同視しないよう、ドイツ語ではこれらを特に「ハンマーフリューゲル」と呼んでいる。

つい最近までは場所塞ぎな骨董品でしかなく、楽器としての価値などは忘れ去られていた。ところが最近のレトロブームにも関係あるのか「古いものの価値」が見直されるようになり、今頃になって血まなこでこれらの楽器が探し求められるようになった。

戦時中に食料品と交換されたらしい楽器が農家の納屋の片隅でロボロになって見つかったりする事があるが、これを引き取って復元するには特殊な知識や技術が必要である。

ヴァツェック氏を御紹介しよ



ヴァツェック氏の息子のゲオルク君。昼はピアノ作りの修行、夜はダンスの先生

ピアノ工場のスタッフと。筆者が左手に持っているのがハンマーフリーゲルのチューニングハンマー、右手のは現代のピアノ用のもの

ダンパー機構

余ったスペースが本棚になっている珍しい型のハンマーフリーゲル



う。「えーっ、こんなところてー？」
と言われそうな小さな雑然とした
仕事場で働く、気さくで冗談と駄
洒落が大好きなアルフレッド・
ヴァツェック氏は、世界的にも有
名なハンマーフリーゲルの検定
と修復の権威である。
代々ピアノ製造を生業としてお
り、彼ですてに3代目、父親のも
とで修行中のゲオルク君は4代目
になる。こんなところにも伝統は
根強く生き続けている。
ヴァツェック氏のもとには全世
界から歴史的ピアノの修復依頼や
相談が持ち込まれるが、それだけ
に彼の目も確かだ。朽ち果ててし
まったような状態にあるピアノの
価値判断も容易ではないが、氏が
一番悩むのは、その楽器の修復後
の歴史的価値を左右することにも
なる。「どの部品はそのまま再生使
用でき、どの部品は交換するべき
か」という判断だそうだ。
ハンマーフリーゲルは木製の
枠組み自体が弦の張力に負けてね
じれてしまったもの以外は、お金
さえかければ程度の違いこそあ
れ、どれもそれなりに直るとい
う。
現代ではもうとても手に入らな
いのでは、と思われするような材料
でも肝腎なのは探すこと。根気よ
く探しさえすれば必ず見つかるそ
うだ。こんな時にはお爺さんの代

から捨てずのためにあるガラクタ
箱がしばしばものを言う。

紛失してしまったり、損傷の度
が大きな部品は装飾用の小物も含
め、オリジナルを手本に愛情を込
めて手で作られる。考えてみれば
どんな部分でもその当時は手で作
られたのだ。同じ手間さえ厭わな
ければ出来ないはずがない。

博物館の展示品の場合には「時
代の証明」としてなるべくオリジ
ナルの部品を残すことに、修復作
業の目的と価値とがある。しかし
これを楽器として演奏可能な状態
にまで復元するとなると、また別
の問題が発生する。

たとえばハンマーヘッドやダン
パー機構。昔の楽器ではここに弾
性のある柔らかい鹿皮が使われて
いる事が多い。

「骨董価値」を重視するなら、
たとえ硬く乾燥した虫食いの皮で
も出来るかぎり残すべきだが、こ
れではオリジナルの音は望むべく
もない。モーツァルトも愛したに
違いない音色は、新しい部品と交
換してこそ初めて生きかえるの
だ。

この「古いもの」と「新しいも
の」との境界線をどこに引くか、
という基準と判断は、ヴァツェッ
ク氏自身の芸術観の中に生き続け
る。芸術家なのだ。